

ル・パスタ

67



ギヤルソン

アレックスは、パリの料理店の給仕主任をつとめている初老の独身男だ。安価で、よく流行っている料理店の、時分どきの調理場は、まるで戦場のようなさわぎとなる。

その調理場(裏)と客席(表)との間を行ったり来たりしながら、アレックスに扮したイヴ・モンタンが、水を得た魚のように、生き生きとした演技を見せる。むかしは、フランス映画の新鋭として鳴らしたクロード・ソーテ監督も、四年前に、この「ギヤルソン」をつくったときは五十九歳になっていたが、今度も例によって中年以上の日本人を堪能させる映画に仕あげてくれた。モンタンはソーテの映画に出ると、いつもよい。アレックスは、若いころに芸人(ダンサー)暮らしをしていたことが、さりげない仕ぐさに偲ばれ、初老の男のベーツスが、たまらなくよかった。当時六十をこえたばかりのモンタン、円熟の役者ぶりである。

海岸のリゾートに子供たちの遊園地をつくり、そこで小さな料理店を経営することが、アレックスの夢だ。この夢あればこそ、彼は多忙や疲労を物ともせず、あくまでも明るく、はたらきつづける。このところ、重苦しく退屈な映画が、徹くさくさになってしまったSF、バイオレンス、オカルトのようなものばかり観ていた所為か、クロード・ソーテとイヴ・モンタンには胸がすいた。

アレックスが弟のように面倒を見てやっているジルベール(同僚のギヤルソンで、ジャック・ヴィルレが演じる)や、シエフに扮したベルナル・フレッソン、ニコラス・ヴォゲルなど役者もそろって、拮りのきいた男たちの友情を見事に描出する。彼らは一日一日に生甲斐を感じながら生きている。

それにしても、この映画が四年もたってから日本で封切られるのは、ふしぎでならない。むかしのフランス映画は、みんな「ギヤルソン」のような映画だった。世の中は変わったのだろうか、人間のありようは依然、変らないのだ。変わったとおもうのは錯覚にすぎない。